

『大陸新報』に見る戦時期上海のユダヤ社会

— (1) 1939年1～4月 —

菅野賢治

はじめに

『大陸新報』は、日中戦争下の1939年1月、中国・上海で創刊された日本語の日刊新聞である。1943年2月には、1920年代からの古い歴史をもつ『上海毎日新聞』をも併合して、中支における唯一の日本語新聞となった。戦時期の上海で発行されていた邦字定期刊行物の旧号がほとんど遺失してしまったなか、『大陸新報』だけは、終戦後、アメリカ軍に押収されてマイクロフィルム化されたため、1939年1月1日の創刊号から1945年9月10日の最終号まで、完全なセットが保存されることとなった（今日、国立国会図書館所蔵）。よって同紙は、上海を中心とした日本軍政下中国の政治、経済、戦況、時事、文化、芸術の動向を知る上で、まさに第一級の資料価値を有している。

本稿の筆者は、2016年2月～8月、本学の在外研究制度によりオーストラリア、メルボルン大学に滞在中、戦時期、リトアニアからシベリアを横断して神戸に漂着したのち、日本軍政下の上海に移送されて5年間の避難生活を経験した元ポーランド・ユダヤ難民一族の知遇を得た⁽¹⁾。以来、彼らユダヤ難民たちの上海での生活を、日本側の一次資料からも照射して再構成する作業の必要を感じ、『大陸新報』の旧号全体にわたるユダヤ関係記事の検索を行ってきた。その成果を、本稿以下、数回にわたる連載論文として公表していく。

記事からの引用に当たって、ひらがな、カタカナの旧遣いは保存し、句読点もあえて補わないが、漢字の旧字体だけは、適宜、新字体に置き換えることとする。判読不能の箇所には一文字につき「□」の符合を当てた。角括弧「〔 〕」は引用者による補足、「／」の記号は原文上で改行が行われていることを意味する。一つの紙面上、ユダヤ関連の記事が二つ隣接して掲

載されている場合は、同一の通し番号を付し、「記事○a」「記事○b」として分類した。

*

1939年1月1日の創刊以来、『大陸新報』が採り上げた最初のユダヤ関連情報は、折しもドイツからアメリカへの移民申請者の急増ぶりを伝えるワシントン発ロイター通信からの転載記事であった。

【記事1a】 昭和14（1939）年1月12日（木）朝刊1面「三十万に及ぶ／ユダヤ人の米移住／米査証官増派の騒ぎ」

【ワシントン十一日発ルーター】官辺に達した情報によれば、約三万人がドイツにおいて米国移住の許可を待つてゐるといつてゐるが右はドイツの猶太人排斥法の結果と見られ、申請者の約九割が猶太人であると言はれる

この移住申請の洪水は、一九二四年の移民法通過以来のことで移民法によれば、独逸からの移民は毎年二万七千三百七十人の割当があるに過ぎず、現在の申請人全部の入国を許可するとせば十一年を要する訳である

独逸移民割当は一九二九年以来一九三八年に到つて始めて定数に達したが、目下独逸の米国領事館は移民査証の手續に忙殺され、伯林〔、〕ハンブルク、スツットガルト及びウイーンへは、館員を増派した始末である [全文]

そして、その左に欄を接し、親独、反英米、反共を基調としつつ、日本にも忍び寄る「ユダヤ禍」の所在を延々と説く記事が四段抜きで掲載される。

【記事1b】 昭和14（1939）年1月12日（木）朝刊1面「世界平和の敵／猶太の進寇に備へよ（上）」

ユダヤの陰険老獪なる陰謀は全世界をゆさぶりながら今世界は大戦乱勃発への発火点に刻々迫りつゝある、危局なる哉！功利主義自由主義の大旆を翳し平和の仮面を冠りつゝ、口に平和を唱へ巨大なる資本と狡知を武器とし民族パチルス役割を果してゐるユダヤの進寇に備へ今

こそユダヤ禍を芟除せねばならないのだ、ユダヤ弾圧の急先鋒に立つ盟邦ドイツに対する英米の輿論は刻々に硬化して殊に米国では曩に駐独大使に召還を命じたといふ有様で自由主義のユダヤ支持は恰も対蒋援助の如く日に日に熱度を高めつゝあるドイツ国家に魔手を伸ばすユダヤ人は同様の手段を以て日支事変を集中包囲しナショナリズム打倒の策謀を執拗に繞らしてゐる

ユダヤ人は何故に危険か、何故に恐れねばならないのか、それは共産主義圏ユダヤ人、ユダヤ人圏共産主義の密接不可分の関係にあるからである、世界大戦後日英同盟を掌を返すが如く一片の反故と化せしめたのも英国が米国に媚態を示したと云はんよりも実に日本国家を破壊せんと企てたユダヤ人の策謀であつたことを銘記せねばならない、世界の攪乱を事とするユダヤ人こそ盟邦ドイツの敵であるばかりでなく日本の敵、世界の平和と文化の敵、人類共同の敵として警戒せねばならない [ママ] ののである [後略]

記事には文責が示されず、『大陸新報』の記者・編集陣についても、今日、追跡がきわめて困難であるため、こうした反ユダヤ主義的言辞の主な典拠を突き止めることはほぼ不可能であるが、一読して、当時、日本本土の言論界にも一般に見られた観念的にして総花的な反ユダヤ主義⁽²⁾の表出といつてよく、「自由主義のユダヤ支持は恰も対蒋援助の如く」などとして、世界の親ユダヤ的動向を反日援蒋ムードと平行に置いて強調してみせる点を除き、現実のユダヤ居留民を擁する上海の日本語論壇ならではの特徴も特に感じられない。

二週間後、ヨーロッパから難民として押し寄せつつあるユダヤ人に関する記事が初出し、その集団が既存ユダヤ居留民四千五百人に加わることで、上海のユダヤ人口がほどなく一万人の大台に乗りそうである、との見通しが打ち出される。時期的に、中支における邦字新聞『大陸新報』の産声は、囂らずもドイツから上海への亡命を余儀なくされたユダヤ難民たちの悲鳴と涙声に完全に同期していたわけである。

【記事2】昭和14（1939）年1月26日（木）朝刊7面「大上海／外人就職戦線に／ユダヤ人旋風／安住の地を求め一万名」

ナチスの猶太人嫌ひから閉出しを食つてさすらひの旅をしなければな

らなくなつた猶太人は何処へ行く——幾多の国際問題を世界にまく猶太人はその自由の天地を極東の国際都市上海に求めて昨秋以来欧州から来る船でどし [どし] [原文では反復記号] 上陸、旧□廿日、卅日、卅一日の伊太利汽船 [、] 新春上海入港の郵船靖国丸などでも既に五百近い者が下船し新渡来者は二千名に上り在来から上海にゐた約四千五百名を合すると七千名近い猶太人が上海にゐることになるが、この新渡来者の激増に伴ひ春と共に上海の外人就職戦線に異状を呈さんとしてゐる、即ち

去年八月上海に出来た猶太人救済委員会は種々対策を講じ、毎月彼等の生活維持のためユダヤ人経営商店から銀二万弗、カイズローム仏蘭西慈善会から銀一万五千弗、を支出、ロンドン、シンガポール、香港から総計五万三千弗、毎月送金があり

これを以て現在楊樹浦華盛路元江海籍宿舎に約四百名を收容又華徳路一三八号刑務所前元工部局小学校に二千名收容の宿舎を設備中で来週中には完成、目下各所に分散居住してゐる猶太人を收容して、英語を教授、上海就職戦線に乗り出させるべく計画してゐるのでこの [ママ] ため先般ロンドン救済委員会にこれ以上の渡来は收容限度飽和点を突破する旨通知して、上海渡来に S・O・S を発したがドイツにあるユダヤ人中約三千名は既に出発準備を終つてゐるのでこの三月までには上海のユダヤ人は総数一万に達することになるため、上海外人居住者数分野に異変を呈すると共に上海外人間の就職戦線にも相当の影響を与へる結果となるので、語学の天才ユダヤ人の英語習得後は国際都市上海に時ならぬ社会問題をかもし出すものと各方面の関心を集めてゐる。(写真は華徳路の收容所) [全文]

19世紀半ば以降、イギリス植民地主義の大波に乗ってやって来た、イラク、インド出自のイギリス籍セファラディ・ユダヤ教徒貿易商とその家族数百名、ついで1917年以降、ソヴィエト体制を嫌って逃れ出てきた白系ロシア・ユダヤ教徒・ユダヤ人四千名ほどを擁していた上海では、1933年、ナチス政権成立直後からドイツ・ユダヤ人の流入が始まる。上海そのものの人口が1852年の54万人から1948年の540万人と10倍に膨れ上がる過程で、外国人の人口も、1865年の2,297人から1900年の6,774人、1930年の29,997人、1942年の57,351人（日本人を含めると150,931人）へと急激な

伸びを示したが、所詮、それも全人口の0.5～1パーセントを出るものではなかった⁽³⁾。その中にあって、ユダヤ教徒やユダヤ出自の人々の数は、1937年の第二次上海事変と1941年の日米開戦による非ユダヤ系欧米人の流出分を優に埋め合わせながら、最大時で三万人ほどに達していくだろう（イギリス籍セファラディ数百、ロシア系数千、ドイツ＝オーストリア系二万数千、ポーランド系千数百）。

1930年代半ば、上海への新しい流入集団は、まづもってナチス政権を逃れてきたドイツのユダヤ人であった。1934年12月、先住の同胞たちが「ヒルフスフォント（救済基金）」という支援組織を立ち上げて難民受け入れ体制を整え、1937年11月、日本の軍政下に置かれてからは、38年2月、アメリカ国務省の梃子入れにより「アメリカ・ユダヤ人共同配給委員会（ジョイント）」が上海のドイツ・ユダヤ難民のための財政支援に乗り出す。しかし、資金源もさることながら、難民たちの受け皿となる組織として「ヒルフスフォント」だけでは追いつかなくなっていたため、同年8月8日、非ユダヤ出自のハンガリー人実業家パウル・コモル（Paul Komor, 1886-1973）を委員長、ヴィクター・サッスーン（Victor Sassoon, 1881-1961）ほか富裕イギリス籍ユダヤ実業家らを委員として「国際欧州難民救済委員会（IC）」（通称「コモル委員会」）が設立された⁽⁴⁾。

それも束の間、1938年8月15日、ナチス・ドイツによるオーストリア併合（3月13日）後、最初のオーストリア・ユダヤ難民15名がイタリア客船「コンテ・ビアンカマノ」号で上海に到着したのを皮切りに、ドイツのみならずオーストリアからのユダヤ避難民の上海流入に拍車がかかる。そこで10月19日、イギリス籍富裕ユダヤ貿易商エリー・カドゥーリー（Elly Kadoorie, 1867-1944）とその息子たちの呼びかけのもと、セファラディ・アシュケナジの別を問わず、聖・俗の垣根も越え、「ヒルフスフォント」と「コモル委員会」を含むすべての難民支援組織の代表者らが一堂に会し、「上海欧州ユダヤ難民援助委員会（CFA）」なる統一組織を立ち上げる（会計にオランダ出自の実業家ミヒール・スペールマン（Michiel Speelman, 1877-?）が就任して実務を取り仕切ったため、通称「スペールマン委員会」と呼ばれた⁽⁵⁾）。【記事2】で言及されている華盛路、華徳路の収容施設も、すべてこの「スペールマン委員会」が設置し、運営していたものである。

1938年11月9日、ドイツならびにドイツに併合されたばかりのオースト

リアとズデーテン地方の広範囲で発生した「クリスタルナハト（水晶の夜）」事件をうけて、ユダヤ人のヨーロッパ脱出がさらに加速する。11月24日、上海に入港したイタリア客船「コンテ・ヴェルデ」号には187名のドイツ＝オーストリア・ユダヤ人が乗っており、その中に多数、財産と諸権利を放棄して即時出国することを条件にダッハウ強制収容所から釈放された人々が含まれていた。ナチス強制収容政策の実態が最初に上海居留民に伝えられたのは、この時であったと考えられる⁽⁶⁾。

これと密接に関連して、当時の日本政府が使い分けようとした「二枚舌」にも過たず言及しておかなければならない。

当時、日本とドイツ（併合されたオーストリア含む）のあいだには査証相互免除協定が結ばれており、南回り航路で上海を目指すドイツ＝オーストリア籍ユダヤ人の一部が、航路の延長線上、日本本土に大量漂着する事態も懸念されたため、「クリスタルナハト」事件に一ヶ月先立つ38年10月7日、外務大臣を兼任中の首相・近衛文麿は、在外公館長への訓令「猶太避難民ノ入国ニ関スル件」を発し、（一）日本通過後の行先国の入国手続きが完了しており、日本到着時に250円以上の提示金を所持しているという条件が満たされない限り、渡航証明書を発給しないこと、（二）査証相互免除の取り決めがある国からの避難民については、日本への渡航を断念させるよう「説示」すること、（三）それ以外の国籍をもつ避難民については、以後、査証を発給しないようにすることを言い渡した⁽⁷⁾。戦時期の『神戸新聞』を踏査した金子マーティンは、ドイツからのユダヤ避難民について同紙が掲載した最初の記事として「ユダヤ人お断り／神戸港でも昨年の暮から／上陸禁止を断行」（1939年1月15日）に着目しているが⁽⁸⁾、この時、神戸で上陸を拒否された人々も、上海を経由し、査証相互免除協定の効力を持って日本入りを果たそうとした人々であったと推察される。

たしかに1938年12月6日、五相会議で決定を見た「猶太人対策要綱」のなかでは、日本がドイツのようにユダヤ人を極端に排斥することは「帝国ノ多年主張シ來レル人種平等ノ精神ニ合致セサル」という原理原則が謳われる。しかし、この「猶太人対策綱領」の前置きはともかく、それに続く「方針」のなかでは、（一）すでに日、満、支に居住するユダヤ人に対しては、他国人と同様に公正に扱い、特別に排斥するような処置はとらない、（二）今後新たに日、満、支に渡来するユダヤ人に対しては、外国人取締規定の範囲内で公正に処置する、（三）ユダヤ人を積極的に日、満、支に招致

することはしないが、資本家、技術者といった利用価値のある者は例外とする、という三項を掲げつつ、結局、これらは先立つ10月7日の近衛訓令と同趣旨のものであるため、取り扱いとしては先の近衛訓令の要領に従うこと、という添え書きがほどこされる。つまり、この五相会議決定は、ユダヤ人の渡来も外国人一般の入国取締規定に「公正」に則するという建前を謳っておきながら、実務に関する部分では、ユダヤ難民だけに特別扱いを定めた10月7日の近衛訓令を継承するという、明らかな「文面の空虚さ」に包まれた「二枚舌」にほかならなかった⁽⁹⁾。

かくしてドイツ＝オーストリア・ユダヤ難民の日本本土漂着を水際で食い止めようとする一方で、日本軍政下の上海へはほぼフリーパスで大量上陸し始めたユダヤ難民の処遇についても、当然、日本当局は無関心ではいらなかった。

1938年12月26日、上海の日本総領事館にて、陸海軍、特務機関、憲兵隊の関係者、ならびに東京の「回教及猶太問題委員会」（同年4月2日、外務省、陸軍、海軍合同の研究組織として政府内に設置）⁽¹⁰⁾ から上海に出張中であった犬塚惟重・海軍大佐（1890-1965）を交えて連絡会議が開催され、当面の措置として次のような方針が確認される。すなわち、（一）先の五相会議で採択された「猶太人対策要綱」と平仄を合わせ、特段ユダヤ人を差別している印象を与えないようにしながら、警備上の必要を理由にユダヤ難民の上海流入を禁止すること、（二）難民たちから日本警備地区内への居住を求められた場合は、逆にドイツ政府のもとで身分証明の手続きを行うように求め、事実上、居住許可を与えないようにする、というのだった⁽¹¹⁾。

しかし、いかに日本軍政下といえど、上海中心部の共同租界、フランス租界には世界各国の主権がなお手つかずのまま存続しており、日々、黄浦江の碼頭に横付けされる多国籍の船舶から、一見、難民とは思えないエレガントな装いで降りてくる人々（というのも難民たちは、不帰の出立に際し、とっておきの服を身に纏っていたため）をユダヤ難民と見定めて誰何、足止めすることなど、到底、日本当局の手に負える作業ではなかった。

【記事3】昭和14（1939）年1月29日（日）朝刊7面「上海へ猶太人の波」

ドイツ国内に捲起つたユダヤ人排斥運動の火は世界各地に飛火して盛

んに燃え続けてゐるが、欧州方面から上海に入港する各船ともユダヤ人船客で大多数を占められてをり、廿七日入港のナチス汽船グナイズノウ号でも数百名のユダヤ人が来滬してをり、又上海に達した情報によると昨二十七日ドイツ系ユダヤ人一千名がナポリからイタリー汽船コンテ・ピアンコマノ号に乗船、上海に向つたとのことである、二月初旬パレスチナにユダヤ人問題に関する会議が開催される筈で、その準備のためロンドンで委員会が設立され種々対策を協議することになつてゐるが今回のユダヤ人一千名が大挙して国際都市上海に押寄せつゝあるのは彼等がパレスチナ会議にさして期待をかけてゐないことを裏書きするものであらう

実際、ドイツで迫害を受け、ドイツを捨てて溢れ出すユダヤ難民が、ほかでもないドイツの戦艦、あるいはドイツと「鉄の枢軸」で結ばれたイタリアの豪華客船によって上海に運び込まれてくるという事態は、当時、『大陸新報』の一般読者にとって不可思議以外の何物でもなかったであろう。さらには、反枢軸の雄たるイギリスが、本来、ドイツの迫害政策の犠牲となったユダヤ人たちを、彼らの「ホームランド」とも言われる中東のイギリス委任統治領に真っ先に受け入れてもよさそうなところ、逆にパレスチナの門戸を頑なに閉ざしているがために、やむなく遠い東アジアの上海がデフォルトの避難地となっているという、この国際情勢のからくりを十全に理解し、納得することのできる者が、当時、市井の日本人のなかにどれだけいたものだろうか。

究極的には、それが「ユダヤ」の難民であるという理由によって、一体何を恐れ、何に備えたらよいか、実のところほとんど不明のまま、当局がそこに「重大なる社会問題」を見て鳴らす警鐘は、犯罪率の増加と雇用の篡奪という、移民・難民受け入れ反対派における恒久の紋切り型に帰着するのだった。

【記事4】昭和14（1939）年2月23日（木）朝刊7面「流れこむユダヤ人／刑余者も混つてまた一千名／上海前途にひと悩み」

ナチス、ドイツを追はれたユダヤ人約千名はイタリー船コンテピデアモノ号に乗船イタリーを出発し上海に向つたとの報があつたが、廿二日午前十時頃上海に入港し三時頃江海関前の碼頭に上陸した、なほこ

のユダヤ人一行のうちにはイタリーの刑務所に監禁されてゐた者も数名交つてゐるといはれてゐる、今後もユダヤ人の上海移住は続々と行なはれる見込みでありその総数はほゞ一万人に達するであらうといはれ、彼等が上海において就職するとすれば、果然上海の外人職業戦線に異常を来す訳であり、重大なる社会問題を生み出すことになるであらうし関係当局はこの点非常に重用視してゐる

同じ時期、ユダヤ関連のトピックとして『大陸新報』の紙面を賑わわせていたのは、上海に本拠を置いて世界中を飛び回るセファラディ・ユダヤ系イギリス人大富豪、ヴィクター・サッスーンの動静である。

【記事5】昭和14（1939）年2月4日（土）夕刊1面「蔣の焦土政策を非難／サッスーン卿対日制裁を警む」

【同盟ニューヨーク二日発】上海のユダヤ財閥をもつて知られるビクター・サッスーン氏は二日上海への帰途フランス汽船ノルマンデー号でニューヨークに到着したが英米両国の対日制裁を戒めて次の如く語つた

若し日本がソヴェトと戦ふ様な場合には英米両国のなし得る最も賢明なる方法は日本を支援する事であらう、支那の焦土政策は最も非難さるべきものでこの焦土政策は食糧の生産配給を不可能ならしめ日支戦が終了した後必ず支那に大飢饉が起るだらう英米両国は対日経済制裁乃至は輸出禁止等を為すべきでない斯かる方法は決して戦争を終息せしめるに役立つものでない

【記事6】昭和14（1939）年2月15日（水）夕刊2面「早急の復興希望、／サッスーン氏上海へ直行」

【同盟ニューヨーク十三日発】滞在中の上海ユダヤ財閥の巨頭サービクター、サッスーンは十三日朝上海に向けニューヨークを出発した、バンクーバーからエムプレス・オブ・ヂヤパン号に便乗上海に直行する筈であるが、出発に先立ち特に秘書アークライト氏を通じて左の如く語る

今度の支那行で何をするかと言ふ事は今聞かれても困るが戦後の復興が一日でも早ければ良いと思つてゐる従て英米仏三国が提携して

日本に経済制裁を加へれば戦争は直ぐ終ると言つたとか、又それに関する口吻を洩らしたとか言ふ新聞記事は全然嘘だ上海滞在はどれ位の期間になるか行つた上でないと判らない

このように『大陸新報』は、サッスーンみずから英米による対日経済制裁の発動を推奨したことはない、という否認の言辞を中継ぎしてみせるのだが、この点は、少なくともこの時のサッスーンの外遊中、日本外務省がニューヨーク、シカゴ、ヴァンクーヴァーの公館から電文で受けていた報告とは大きく食い違っていた。行く先々で日中戦争の行く末について所見を求められたサッスーンは、たとえ日本が中国との戦争で勝利を収めることができたとしても、すぐさま経済的に行き詰まってしまうであろうし、英米仏の三ヶ国が対日輸出を全面禁止するだけで、たちまち日本軍は中国から撤退し、日中戦争は解決を見るであろう、といった趣旨の発言を繰り返し、シカゴでは、「日本人は力強いコーカサス人（白人）の権利を尊重せねばならない」とも発言していたのである⁽¹²⁾。

サッスーンの発言が功を奏したのか否かは定かでないが、実際にこの2月、アメリカが対日クレジット禁止という政策に踏み切っている。そうしたなか、東京では、元・警視總監、赤池濃（1879-1945）が貴族院予算総会で質問に立ち、今後の上海の運営方針について政府の見解を質した。

【記事7】昭和14（1939）年2月24日（金）朝刊1面「上海租界の撤廃／貴院予算総会 赤池氏から質問」

【同盟東京二十三日発】貴族院予算総会の最終日は廿三日午前九時四十五分開会〔中略〕赤池氏更に第三国の支那における権益、ユダヤ人問題につき質し〔中略〕正午散会した

『大陸新報』では詳しく報じられていないが、この時、赤池が貴族院予算総会の場でどのような切り口から上海の「ユダヤ人問題」を俎上に載せたか、以下に概観しておく⁽¹³⁾。

ソレカラ次ニ御尋ネシタイノハ、「ヴィクター・サッスーン」ノ言葉デアリマス、新聞ヲ見マスルト云フト、斯ウ云フコトガ書イテアルノデアリマス、「ヴィクター・サッスーン」ガ「アメリカ」カラ上海ヘ帰ッ

テ来ルト云フ際ニ於テ、訪問ノ記者ニ対シテ言ツタ、「日本ハ自ラ支那ノ開發ニハ資本ガ足りナイコトヲ認メテ居ルカラ、勢ヒ英米ニ資本ノ供給ヲ仰ガネバナラス、ソレニハ英米ノ在支權益ヲ絶對ニ承認スルコトヲ要スル」〔中略〕「ヴィクター・サッスーン」ガスウ云フコトヲ言ッテ居ルノデアリマスガ、此ノ「サッスーン」ト云フ人間ハ今度ノ支那事變ニドウ云フ關係ガアルカ〔中略〕ソレニ付テ政府ノ御所見ヲ伺ヒタイト云フノデアリマス

これに対して有田八郎外務大臣が、「英米人ハ殆ド皆サウ云フ風ニ考ヘテ居ルヤウデアリマス」として一般論への逃げ口上を打つと、赤池は追及の手を緩めず――

私ハ「サッスーン」ト蒋介石政權トノ關係ニ付テハ、特別ナモノガアルト云フコトヲ考ヘテ居ルノデアリマスカラ、〔中略〕外務大臣ノ御考ハ唯、所謂単純ナ「ユダヤ」財閥デアルノダト云フ御考デアリマスカ、ソレ以上ノ政治的ニ非常ニ深イ關係ヲ持つモノデアルト云フ御考デアリマスカ

と詰め寄った。これに有田が答え、中国においては財閥と政治家の關係が密接であることから、サッスーンも「蒋介石政權ノ一派ノ者ト、相当密接ナ關係ヲ財的ニ持ッテ居ルト云フコトハ想像出来ル」と、ふたたび一般論をもって逃げ切ろうとすると、赤池は、「〔サッスーン〕ナル者ハ、所謂我が国ガ蒋介石政權ト戦ッテ居ルト云フナラバ、蔣政權ノ一部デアリマス、敵ノ一部デアリマス、漫遊ノ普通ノ金持ノ遊歴家トハ違フノデアリマス」とし、その先、速記録から察してもおそらく二十分は下らない長広舌を繰り広げた。

權益ノ擁護ト云フ名前ノ下ニ於テ、即チ日本ニ戦果ヲ取メシメナイ、御承知ノ通り今日ニ於テハ日本ヲシテ戦前ノ状態ニ歸ラシメヨウト云フ策謀ガ行ハレテ居ルノデアリマス〔中略〕我々ハ「アメリカ」ニ於ケル所ノ大統領ヲ擁護スル所ノ「ユダヤ」人ガ、如何ニ策動シテ居ルカヲ知ッテ居リマス〔中略〕此ノ問題ヲ、「サッスーン」ノ状況ヲ斯ク迄簡單ニ御覽ニナリ〔中略〕格別ノ注意ヲ御払ヒニナラナカッタシ

タナラバ、私ハ帝国ノ為ニ真ニ憂慮ニ堪ヘナイ次第デアル⁽¹⁴⁾

そしてその関連質問として、赤池は、上海のユダヤ難民のことにも過たず言い及ぶのだった。

上海ニ沢山「ユダヤ」ノ避難民ガ、即チ、「ドイツ」ヲ追ハレタ所ノ避難民ガ上海ニ入ッテ来マシタ、此ノ上海ニ参ッタノハ今日ニ於テハ約千五百名以上ダト言ハレテ居ルノデアリマスガ、私ハ此ノ問題ハ将来ニ向ッテ随分大キナ懸念ヲ貽スモノダト思フノデアリマス [中略]「ユダヤ」人ガ「ユダヤ」ノ救護会デ以テ保護シテ居リマスケレドモ、其ノ人間ヲ大体ニ於テ彼等ガ住ンデ居ル租界ノ方ニ入レナイデ、日本ノ軍隊ガ占拠シテ居リマシタ楊樹浦其ノ他ノ附近ニ於テ [中略]日本人ト相対抗スルヤウナ姿勢ヲ取ラシテ居ルノデアリマス [中略]此ノ日本ノ中以下ノ商工業者ガ「ユダヤ」人ト競争スルコトニナツタ時ハドウナルカ、私ハ樂觀ヨリハ悲觀ノ方ガ多分ニアルヤウニ考ヘルノデアリマス、此ノ日本人ガ若シ「ユダヤ」人ノ為ニ……大袈裟ニ申シタナラバ五万位カラノ「ユダヤ」人ガ段々入ッテ来テ、日本人ノ就職ヲ奪ヒ、日本人ガ彼等ノ為ニ追出サレルヤウナコトニナツタト假定シタナラバドウデアルカ⁽¹⁵⁾

ここで赤池自身がその種の三段論法を組み上げているわけでもなくとも、「反日親蔭」であることが今や明白たる「ユダヤ人」サッスーンが「ユダヤの救護会」を立ち上げるなどして保護に努めているのが「ユダヤの避難民」である以上、その難民集団が日本軍部による上海の管理・運営にとって好ましい存在であろうはずがない、という主張が織り込まれていることは言を俟たない。

こうした本国における論調に刺激され、目を覚まさせられた結果なのか、先にサッスーン自身による対日強硬論の否認発言を受け売りしていた『大陸新報』は、以後一転、彼の「腹黒さ」と日中戦争に関する「曲解」をことさら強調していくことになる。

【記事8】昭和14（1939）年3月7日（火）夕刊2面「あすサツスーン氏
来滬／一年振り「上海は良い。」

七日午後一時入港のM・ヂヤパン号で上海財閥の巨頭サー・ビクター・サツスーン氏が一年ぶりで上海へやつて来る、秘書一名連れてヴァンクーバー出帆以来ひたすら新聞記者団との会見を避けてゐたが神戸出帆に際し日本記者団の包囲攻撃にたまりかねたサツスーン氏もやつと口を開き

「一年不在であつたので上海のことは少しも分らぬ、無論それを知るために出かけたわけだが自分の知り得た範囲では上海は非常によくなつてゐるといふ結論に達してゐる、然し将来の見透しなどは神ならぬ身の知る由もない、自分は大抵一年ぐらゐの予定を持つてゐる男だが、今回の上海行きには何んとも予定が樹て難い」

と相変らず腹の黒い所を語つてゐた

【記事9】昭和14（1939）年3月10日（金）夕刊1面「武力征服困難な
／支那の民族心理／サツスーン氏の回滬談」

上海財界を牛耳るヴィクター・サツスーン氏は七日入港のエムプレス・オヴ・ヂヤパン号で一年間に亙る外遊を終へて回滬したが、氏は上海タイムズ記者に対し次の如き会見談を行つた、上海の代表的英財閥が日支事変を如何に曲解してゐるかを語る資料としてその要旨を左に訳出する（写真はサツスーン氏）

余の信ずる所では支那人は彼等自身の選んだ政府の下に於てならばアジアの開発に日本と協力するかも知れぬが日本の属国たるに甘んずるものではなからう、支那は外国銃剣がバックする政府によつて支配されることは出来ない日本は恐らく現在の戦争に勝利を占めないであらう、日本が支那との提携を欲してゐると称するのは勝手であるが、現在の戦争が支那民族の敵意と憎悪を喚起したことは否定する、ことが出来ぬ〔中略〕日本の民衆に対して支那は征服され得るものでなく支那人自身の手で選ばれた政府との協力の精神のみがアジアの平和的、友誼的開発を成功せしめることを漸次知らせる必要があらう〔後略〕

その間も、ドイツとその占領地域を逃れ出たユダヤ難民たちの上海流入

は一向に収まる気配を見せなかった。

【記事10】昭和14（1939）年4月18日（火）朝刊7面「家のないジユウ
／ドイツを追はれ上海へ／避難所は満腹状態」

ドイツ国内生活を拒絶されたユダヤ人はその安住避難の地として上海を選び、各外国汽船でぞくぞくと移住しつゝあるが昨秋以来本年四月上旬まで共同租間に移住したユダヤ難民は一万を越え、工部局ではこれら難民救済対策に困窮してゐる折柄、亦リバプールから達した情報によれば、ユダヤ難民三千名がドイツ汽船でハンブルクを出帆、来る五月一日来滬する筈で今からこの取扱ひに当局では頭を悩ましてゐる

上海におけるユダヤ難民救済はサツスン財閥の資金及び難民救済会がこれに当つてゐるが、これらユダヤ難民の来滬に関しては英国政府との或る種の了解によるものと見られてゐる

これがため難民収容所も飽和状態に達してをり、就職させる必要があり、多量のユダヤ難民の来滬は国際都市上海の外人就職戦線に異常を来たす事になるであらう

実際、共同租界の「工部局（Board of Works）」（「上海市議会（Shanghai Municipal Council）」の旧名にして俗称）では、すでに1938年12月、これ以上の難民上陸は居留地の死活問題に直結するとして、関係機関と船会社を通じて流入停止を求めていくことが決定していた⁽¹⁶⁾。『大陸新報』としても、常に「工部局」において多数派を占めるイギリス人たちが悲鳴を上げているにもかかわらず、難民流入にまったく歯止めがかからないことから、背後に働くより大きな力学として「英国政府との或る種の了解」、すなわちサツスーンが財力にものを言わせ、難民集団の流入によって上海の日本経済に打撃を与えようとする意図の所在を想定せざるを得なかったわけである。

かくして許容量を超えて虹口地区に流れ込んだユダヤ難民たちの存在は、現実の社会問題として日本居留民の目に立ち現れ始める。

【記事11a】 昭和14（1939）年4月23日（日）朝刊7面「支那人を乗せて／警備区域を通過／狡猾きはまるユダヤ人種／わが憲兵隊で探知／工部局の不信態度／無免許バスを黙過」

河向ふから溢れたユダヤ人の群は続々虹口へ流れこんで華徳路方面に無気味なトグロを巻き鶴の目鷹の目で金儲けの口を探しつゝ、あつたが去る七日から約十日間に亘り我警備区域内であるガーデンブリッジと楊樹浦間の無免許バス営業をなしてゐることを探知した租界憲兵隊の活動によつてこれを即刻中止の処分に付された事件がある〔中略〕ユダヤ人某が経営者でその下に数名のユダヤ人運転手を使用し警備地区であるにも拘らずわが当局に何らの願ひ出もなくもぐり営業をなし外人運転手なるが故に支那人乗客があるにも拘らず歩哨線をノン・ストップでぶつとばしわが警備に非常なる不利益を与へてゐたものである、一方けしからぬのは同路線の管轄署である工部局滙山警察署がこのもぐり営業を十日間に亘つて黙過してゐた事実であるもしこのバスを悪用して不逞支那人が虹口方面への潜入を企てるものがあつたとすれば、わが警備に由々しき影響を与へることは百も承知の工部局がこの不信な態度をとつたことに当局はいたく憤慨してゐる

【記事11b】 昭和14（1939）年4月23日（日）朝刊7面「追はれたジユウ／搔払ひ品づくめで生活／バスにゝとぐる。を巻く」

上海に追はれ、共同租界を追はれたユダヤ人は最近続々と虹口方面へ流れこんで来たが住むに家なき彼らは華徳路附近に怪しげな生活を営んでゐる、廢墟の中に捨てられたバスのボデーをかつぎだしこれを写真に見るやうに路地の中へ十数台も並べ、これも附近から失敬して来たトタンで屋根を蔽ひ一文の資本要らずでとにかくも雨露を凌ぐに足る居を構へてゐる、所帶道具も一目で搔払ひとわかる品物ばかりでこゝに出入する約百人近くの一団はいづれも乞食なみの服装である、彼らには一定の職があるわけではないからパンに困ると搔払ひに出動する実に物騒なる集団で華中バス楊樹浦線に出没してスリを働くのもこの一味であるといはれてゐる、この一団はわが警備上実に厄介な存在であるにも拘らず工部局が知らぬ顔の半兵衛をきめこんでゐるのは不誠意極まるこの一部落の存在を目撃する邦人達は一日も早くこれを清掃することを工部局に要望してゐる〔全文〕

ひとつ見方を変えれば、地上のいかなる場所でも、あらゆる手段を尽くして生き延びていこうとする人間の生命力、生活力を物語る如実なエピソードでもあるが、当時の『大陸新報』とその読者にとって、それは、厄介にして物騒な「乞食」集団が形成する「とぐろ」以外の何物でもなかった。(続)

*本研究はJSPS科研費、平成29～32年、基盤研究(C)(1)課題番号17K02041の助成を受けたものである。

註

- (1) 菅野賢治「ユダヤ難民と日本(1940～41年)——ヴェイラント＝ヤクボヴィチ家の足跡を辿りながら」、『東京理科大学紀要(教養編)』, 2018年3月。
- (2) 戦前、戦中の日本における反ユダヤ主義言説については、松浦寛『ユダヤ陰謀説の正体』, ちくま新書, 1999年, 74頁以下。同著者による『日本人の〈ユダヤ人観〉変遷史』, 論創社, 2016年も併せて参照。
- (3) 鄒依仁『旧上海人口変遷的研究』, 上海人民出版社, 1980, pp. 90-91, 141.
- (4) David Kranzler, *Japanese, Nazis & Jews: The Jewish refugee community of Shanghai, 1938-1945*, Hoboken, New Jersey, KTAV Publishing House, Inc., 1988 (first ed. 1976), pp. 91-92.
- (5) 丸山直起『太平洋戦争と上海のユダヤ難民』, 法政大学出版局, 2005年, 62-65頁。
- (6) 同, 60-61頁。
- (7) 阪東宏『日本のユダヤ人政策: 1931-1945——外交資料館文書「ユダヤ人問題」から』, 未来社, 2002年, 362-263頁。
- (8) 金子マーティン『神戸・ユダヤ人難民1940-1941——「修正」される戦時下日本の猶太人対策』, みずのわ出版, 2003年, 206-208頁。
- (9) 阪東, 前掲書, 89, 216頁。
- (10) 丸山, 前掲書, 88-89頁。
- (11) 同, 71-72頁。
- (12) Pamela Rotner Sakamoto, *Japanese Diplomats and Jewish Refugees: a World War II dilemma*, Westport, Praeger Publishers, 1998, p.71; 阪東, 前掲書, 115頁。

- (13) 国立国会図書館所蔵『帝国議会貴族院委員会速記録』昭和篇75, 200-201頁。
- (14) 同, 203頁。
- (15) 同, 205頁。
- (16) Rotner Sakamoto, *ibid.*, pp.59-60; 丸山, 前掲書, 71頁。

The Jewish Society in wartime Shanghai as reported in *Tairiku Shinpo* (Part I: January - April 1939)

Kenji Kanno

Abstract

Tairiku Shinpo (*The Continental News Report*) is a Japanese daily founded in Shanghai on 1st January 1939. Whereas most Japanese periodicals published in the former possessions in China have been lost, the entire collection of *Tairiku Shinpo* up to its final issue on 10th September 1945 has been preserved, since it was seized and microfilmed after the war by the U.S. forces. It constitutes an indispensable source for historical research into the multinational society of Shanghai's colonial period.

This series of papers is based on a thorough search of articles in *Tairiku Shinpo* identifying those that mention Jewish residents in Shanghai under the Japanese military control. The present first part covers the period January-April 1939, a period characterised by an influx of Jewish refugees from Germany and its occupied territories.

Through this contemporaneous press information, we learn that the massive arrivals of German-Austrian Jews to Shanghai from the autumn of 1938 began to provoke intense alarm from the local Japanese authorities. The alarm was all the more intensified by anti-Japanese and pro-Chinese statements made to journalists by Victor Sassoon (1881-1961), a wealthy Jewish resident of Baghdadi descent, who generously supported the Jewish refugees by the intermediary of the 'International Committee for European Immigrants in Shanghai (IC)', alias 'Komor Committee'.

It is particularly interesting to observe that in 1939, Japan and its continental possessions were vigorously trying to block the entrance of Jewish refugees, while at the same time saving face through the 'Five Ministers' Conference' (6th December 1938) which declared to the whole world that Japan would never be in step with the anti-Semitic policy adopted by her ally, Hitler's Germany.